

## 履歴のあらまし

——人間関係的試み——

加藤 九 祚

一九二二年（大十一）五月十八日、韓国、慶尚北道に生まれる

一九三六年四月、山口県宇部市、私立長門工業学校（乙種）入学。機械鑄物用の木型製作を専攻。

一九三九年四月、株式会社宇部鉄工所に入社

一九四〇年四月、宇部市立見初小学校にて代用教員として勤務。小学校の恩師二木謙吾先生（後に参議院議員） 畠中巧先生の推薦による。一年後退職

一九四一年十一月、横浜第一中学校にて、高等学校入学者検定試験に合格

一九四二年（昭十七）四月、上智大学予科入学。主としてヘルヴェーグ、戸川敬一教授についてドイツ語を学ぶ

一九四三年十二月、上智大学予科仮卒業

一九四四年一月、工兵第二連隊（仙台）に入隊

一九四四年四月、幹部候補生試験（第一次）に合格。班長中沢圭二（軍曹）の指導をうく。中沢氏は現在京都大学名誉教

授

一九四四年九月、甲種幹部候補生試験に合格

一九四四年九月、陸軍工兵学校（松戸）に入校

一九四五年三月、兵科見習士官として混成第一〇一連隊工兵中隊に配属。幹部候補生（第一次）の教育にあたる。北朝鮮、豆満江岸にて勤務。連隊長山内静雄大佐

一九四五年六月、新編成の第一三九師団工兵大隊に転属（東南満州の敦化）師団長富永恭次中将、大隊長横澤鉄郎少佐。大隊本部付通信班長として勤務

一九四五年八月二〇日、敦化飛行場にて、ソ連軍によって武装解除、捕虜となる。関東軍命令によって一階級昇進し、陸軍工兵少尉

一九四五年九月、ソ連軍の命令によって作業隊長の大隊長となり、まる二年間この職に止まるも、その後は「民主運動」によって職から追放される。国際条約によって将校は労役を免ぜられるも、あえてすすんで労役に服す。イルクーツク州とアムール州の十数カ所の収容所を転々とする。その間角田文衛先生、近藤鳩三、小川五郎（高杉一郎）氏ほか多くの人たちを知る

一九五〇年四月十七日、引揚船明優丸にて舞鶴上陸。恩師小林珍雄教授、浜徳太郎先生ほか多くの人びとの世話になる

一九五一年四月、上智大学文学部ドイツ文学科に復学（新制大学三年に編入）。恩師戸川敬一先生の推薦による。ハンス・ミュラー先生の講義「リルケ詩論」をドイツ語で書く

一九五三年三月、上智大学卒業。卒論は『ロシアにおけるゲーテ像』（ドイツ語）

一九五三年四月、株式会社平凡社に入社。小林珍雄先生の推薦による。社長下中弥三郎（のち下中邦彦）氏に育てられる  
一九七一年十二月末日、平凡社退社。平凡社在職中は編集者として井上靖、江上波夫、榎一雄、佐口透、護雅夫、山田信

夫、藤枝晃、増田四郎、泉靖一、岡正雄、梅棹忠夫、樋口隆康（順不同）、ほか多くのすぐれた先生方に出会い、親しく薫陶をうける。また、販売力が必要なときには営業部員を志願し、ほとんど日本全国の津々浦々の書店をまわる

一九七二年（昭四七）、上智大学外国語学部（ロシア語）非常勤講師。ピオベザーナ、江沢国康、宇多文雄教授らの推薦による

一九七三年四月、新設の上智短期大学助教授（一九七五年三月まで）。主にピオベザーナ、八幡一郎両教授の推薦による

一九七五年（昭五〇）四月、国立民族学博物館（民博）教授。主として館長梅棹忠夫博士の引立てと白鳥芳郎・山田信夫先生の推薦による。主に旧ソ連邦とモンゴル人民共和国の民族学標本の収集と研究に従事。在職中、司馬遼太郎氏、小松左京氏をはじめ多くの知己を得る

一九七六年三月二三日——一九七七年一月二二日間、日本学術振興会よりモスクワ大学とレニングラード大学へ派遣される

一九八六年（昭六一）三月、民博を定年退職

一九八六年四月、民博名誉教授

一九八六年四月、相愛大学人文学部教授。森川晃卿学長の引立てによる

一九八八年（昭六三）四月、創価大学文学部教授。高松和男先生はじめ篠原誠理事、中野毅教授ほかの諸先生の引立てによる。以後教授、特任教授を経て、一九九八年三月末定年退職。在職中六年間にわたって創価大学シルクロード学術調査団の団長をつとめる（土井健司教授の補佐を得て）。また在職中創立者池田大作先生をはじめとする大学指導部の方々のほか、多くのすぐれた同僚や学生たちとの出会いは楽しく、学生の中から五人の長期留学生（ウズベキスタンと新疆）が出たことは私の誇りであると思っている。一九九五年以後も、なら・シルクロード学術研究センター、小松左京先生、庄司ユリ子教授、山口光子教授、木曳正夫氏らの援助を得てウズベキスタンとキルギスタンで発掘調査をし、ま

た今後もつづける予定である。

一九六三年にはじめて旧ソ連を旅行し、現在までに少なくとも三〇回旧ソ連各地を訪れる。

一九七六年(昭五二)、『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』によって大仏次郎賞(第三回)受賞。主として井上靖、

中野好夫両先生の推薦による(ときく)

一九八三年(昭五八)三月、『北東アジア民族学史の研究』によって学術博士(五九一五号)、大阪大学(人間科学部)。

甲田和衛、徳永恂両教授に負うところが多い

一九九一年十一月二五日、大阪市民表彰を受く

一九九二年一月十四日、ロシア科学アカデミー名誉歴史学博士。リディア・グロムコフスカヤ、A・ジエレピャンコをはじめ多くの人の推薦による

一九九三年八月二〇日、ウズベキスタン共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所名誉博士。主として所長ガフルベコフ博士、トルグノフ上級研究員の引立てによる

一九九四年七月二九日、一九九四年度大同生命地域研究賞を受賞。梅棹忠夫先生、大林太良先生、小松左京先生、石毛直道氏、松原正毅氏らの推薦による

(付記 「定年」を迎えるにあたり、感謝の意味で、世話になったおもに師すじの方々のお名(ごく一部)をあげさせていただいたが、私が同様に感謝すべきは、ここにお名前のあがっていない多くの、そして多くの先輩、同僚、後輩の人々であると思う。「定年」は世間の約束事にすぎないし、ほんとうの「定年」が「いのちの終り」であるとするれば、私にとってその「定年」まではまだいくばくかの時間が残されているようである。どうぞ今後もお力ぞえをたまわりますようお願いいたします)

著書

- 『シベリアの歴史』一九六三年五月三一日 紀伊国屋書店
- 『シルクロードの十字路』一九六五年九月一〇日 ベースボールマガジン社
- 『西域・シベリア』一九七〇年二月一〇日 新時代社（現在、中公文庫）
- 『シベリアに憑かれた人々』一九七四年五月二五日 岩波新書
- 『ユーラシア文明の旅』一九七四年六月二〇日 新潮社（現在、中公文庫）
- 『天の蛇―ニコライ・ネフスキーの生涯』一九七六年四月二五日 河出書房新社
- 『中央アジア遺跡の旅』一九七九年二月一日 日本放送出版協会（NHKブックス）
- 『シベリア記』一九八〇年三月一五日 潮出版社
- 『熱砂の中央アジア』（加藤久晴と共著）一九八一年一〇月六日 日本テレビ放送網K・K
- 『万年雪の大コーカサス』（加藤久晴と共著）一九八一年一〇月二九日 日本テレビ放送網K・K
- 『ヒマラヤに魅せられたひと―ニコライ・レーリヒの生涯』一九八二年一月三〇日 人文書院
- 『アジア最深部』（ソビエトと）（共著）一九八四年四月一〇日 日本放送出版協会
- 『ユーラシア記』一九八四年二月一日 法政大学出版局
- 『北東アジア民族学史の研究―江戸時代の日本人の観察を中心として』（博士論文）一九八六年三月二〇日 恒文社
- 『北・中央アジアの歴史と文化』一九八七年一〇月一日 日本放送出版協会
- 『ユーラシア野帳』一九八九年九月二〇日 恒文社
- 『日本人の心のシベリア』（ロシア語）一九九二年九月 ノボシビルスク刊
- 『初めて世界一周した日本人』一九九三年九月一〇日 新潮選書

- 『シルクロード文明の旅』一九九四年三月一〇日 中公文庫
- 『中央アジア歴史群像』一九九五年一月二〇日 岩波新書
- 『古代ホラズムの研究』（共著）一九九六年三月三一日 なら・シルクロード学研究センター
- 『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』一九九七年三月三一日 なら・シルクロード学研究センター

編著

- 『シルクロード事典』（前嶋信次と共編）一九七五年九月三〇日 芙蓉書房
- 『エルミタージュ博物館』（世界の博物館シリーズ）（共著）一九七九年一月一〇日 講談社
- 『日本のシャマニズムとその周辺』（共著）一九八四年六月二〇日 日本放送出版協会
- 図録『南ウズベキスタンの遺宝 中央アジア・シルクロード』（G・プガチエンコワ、E・ルトヴェラーゼと共編）一九九一年一月二日 創価大学・ウズベク文化省ハムザ記念芸術学研究所
- 論集『ダルヴェルジンテパD T 25』一九八五—一九九三、発掘報告（共編）一九九六年二月二〇日 創価大学

翻訳書

- ソヴェト大百科事典『第二次世界大戦』（相田重夫と共訳）一九五五年一月一日 青木文庫
- ロジェ・ガロディ他著『実存主義批判』一九五五年二月二五日 青木文庫
- ボリス・ジュエーコフ著『湖底に消えた都（イッシク・クル湖探検記）』一九六三年二月二〇日 角川書店
- アルダン・セミヨノフ著『知られざる大地（チェルススキーの生涯）』一九六五年五月二五日 学習研究社
- N・ブルジェワルスキー著『黄河源流からロプ湖へ』一九六七年二月五日 白水社

- A・オクラードニコフ著『黄金のトナカイ』一九六八年九月一五日 美術出版社
- ヤクボーフスキー他著『西域の秘宝を求めて』一九六九年五月一〇日 新時代社
- パセツキー著『極地に消えた人々』一九六九年八月五日 白水社
- V・マッソン著『埋もれたシルクロード』一九七〇年一月二七日 岩波新書
- S・ルデンコ著『スキタイの芸術』（江上波夫と共訳）一九七二年一月二〇日 新時代社
- シムチェンコ著『極北の人たち』一九七二年二月二〇日 岩波新書
- A・オクラードニコフ著『シベリアの古代文化』（加藤晋平と共訳）一九七四年八月一六日 講談社
- V・アルセニエフ著『デルス・ウザーラ』一九七五年六月二〇日 角川書店
- G・ステラー著『カムチャツカからアメリカへの旅』（本書にはS・クラシエニンニコフ著『カムチャツカ誌』の抄訳も含まれている）一九七八年一月五日 河出書房新社
- シーボルト著『日本』（共訳）一九七九年五月一八日 雄松堂書店
- L・アリバウム著『古代サマルカンドの壁画』一九八〇年六月二九日 文化出版局
- B・ピオトロフスキー著『埋もれた古代王国の謎』一九八一年九月一〇日 岩波書店
- B・ピオトロフスキー著『エミルタージュ美術館』（生田圓・青柳正規と共訳）一九八五年一月二四日 岩波書店
- D・マイダル著『草原の国モンゴル』一九八八年七月二五日 新潮社
- V・サリアニデー著『シルクロードの黄金遺宝』一九八八年七月二八日 岩波書店

論文その他は省略